

グアム島の戦闘
(歩兵第12連隊第3大隊の戦闘)

序にかえて

本戦記は終戦後、地に埋もれ誰も語る者なく、戦史上より忘却されんとする運命にありしを、九死に一生を得て帰還して居られた佐藤孝・武田両氏の当時の貴重な手記と、たまたま本年1月陸上自衛隊グアム島戦史調査団団長梅沢准将以下の苦心の調査資料などを中心として、調査団員の佐々木時四郎二佐(元歩兵第12連隊中隊長)殿が赤心をこめて集録したものであります。

当玉砕部隊中村大隊は、元歩兵第12連隊の精鋭で編成され、第6派遣隊に編入され、本戦記の如く奮戦されたもので、71年の永い歴史を持つ歩兵第12連隊の戦史を後世に伝えるため、本会第9回総会に肖り発行するもので、各方面の方々の御力添えを深謝いたします。

昭和37年9月9日

丸 亀 重 陽 会

連隊歴史の記述

昭和19年

- 2月20日 「ロ」号演習部隊(第11歩兵団)要員として参加を命ず。
- 26日 第三大隊は大隊長中村大尉指揮の下に「ロ」号演習参加のため出発す。
尚、当分の間、当大隊は欠とす。
編成中における各隊長左の如し、
- | | | |
|--------|--------|---------|
| 大隊長 | 陸軍大尉 | 中 村 義 久 |
| 副 官 | 陸軍少尉 | 土 居 利 雄 |
| 第九中隊長 | 陸軍中尉 | 勇野喜 正 泰 |
| 第十中隊長 | (陸軍中尉) | 鈴 木 義 基 |
| 第十一中隊長 | (陸軍中尉) | 宮 本 実 |
| 第十二中隊長 | (陸軍中尉) | 森 英 昭 |
- 第三機関銃
中隊長(陸軍中尉) 西 山 義 男
- 3月1日 第三大隊の残留人員(主力は初年兵)は夫々第一大隊に転属を命ぜらる。
第九は第一など「ロ」号演習の残務整理を兼ね、連隊の一斉経理検査を施行し、以て内務の緊縮を図る。

目 次

1. グアム島の大観と作戦の全般背景
 - a グアム島の大観
 - b 作戦の全般背景
2. 歩兵第12連隊3大隊のグアム島進駐の経緯
 - a 東満の駐とん地宝東出発からグアム島到着迄の大観
 - b 編成並びに諭送
3. 作戦準備――中村大隊の到着から米軍の上陸までの概況
4. 作戦実施――米軍の上陸と両大隊の健斗
 - a 対上陸戦闘の大要
 - b 中村大隊各中隊の戦闘概要
5. 本作戦の特色と成果の概要
6. 慰霊の辞

注 本稿はグアム島からの生還者、武田氏・佐藤氏等の貴重な手記を中心として収録したものである。(昭 37.7.15) (文責 佐々木)

歩兵第12連隊第3大隊の戦闘概要
(第2次大戦グアム島)

1. グアム島の大観と作戦の全般背景

a グアム島の大観

(1) グアム島の歴史

グアム島は1521年〔約440年前〕マゼランが発見し、1898年(約60年前)米西戦争の結果米領となり、開戦に至った。

(2) グアム島の位置

グアム島は横浜の略ぼ直南約2500Kmにある米海軍の基地で、わが占領後はサイパン島とともに大太平洋の防波堤ともいふべき重要な戦略的地位にあった。

(3) グアム島の地誌

グアム島は、その面積は500Km²でほぼ淡路島の大きさに等しく、全周150Km、上陸適地は延べ約50Kmであった。島の南部の西北海岸よりに山地があり高さ200～300mで、北部は概ね平坦で2～3の小山がある程度である。

b 作戦の全般背景

(1) 開戦へき頭わが陸海軍は、ハワイ空襲、マレー|こ上陸、比島の攻撃開始等緒戦に快勝したが、進攻作戦は広く中南部太平洋方面においても大胆に繰り上げられ、陸軍の南海支隊(汪、支隊長はかつて歩兵第12連隊に勤務せられた堀井富太郎少将 144 i 基幹)は、海軍の協同の下に、昭和16. 12.10グアム島を占領し、次で同島の防備を海軍に移譲して長駆ラバウルを攻略した。

(注) 日本軍の占領間グアム島は大宮島と称せられた。

(2) 次で占領地域の外郭要地作戦を実施したが、昭和17年6月5日のミットウェイ作戦を転機とし、海洋主動権は一変して米側へ移り、われは守勢に転移した。

(3) 昭和17年8月突如として行われた米軍のガダルカナル島に対する反攻開始以来、日本軍はこれが奪回に苦闘を重ねたが、18年2月遂に兵力を撤収し、爾来南東太平洋方面において一大消耗戦が展開された。

(4) 昭和18年9月中旬、従来の消耗戦から思い切って間合いをとり不敗の戦略態勢を造成するため、千島、小笠京、内南洋(中西部)及び西部ニューギニア、スンダ、ビルマを含む圏域を所謂「絶対国防圏」としたので、グアム島はサイパン島とともに極めて重要な戦略的地位におかれた。

(5) 昭和19年3月、連合艦隊司令長官の指揮下に中部太平洋方面諸島の守備に任ずべき第31軍が新設され、5月下旬、5コ師団・7コ独立混成旅団1をもつて展開を構成した。

2. 歩兵第12連隊第3大隊（独立歩兵第320大隊：中村大隊、独立歩兵第319大隊：宮西大隊）のグアム島進駐の経緯

a 東満の駐とん地宝東出発からグアム島到着までの大観

○宝東 19. 2. 26
 図們 19. 2. 28
 ○釜山着 19. 3. 1
 発 19. 3. 3
 ○門司 19. 3. 4
 瀬戸内海経由
 ○横浜 19. 3. 8
 ○東京着 19. 3. 10
 発 19. 3. 12
 ○サイパン島 19. 3. 19
 ○グアム島 19. 3. 20

編成出発人員	
将校	24
准士官	8
下士官	85
幹候	15
兵	486
計	618

b 編成並に輸送

(1) 昭和19年2月23日未明、宝東駐とん地将校校集会所において連隊長原田大佐から、歩兵第12連隊第3大隊に対し、口号演習が発令された旨伝達された。

さ

b 25日次の通り（抜すい）編成を完結した。

大隊本部

大隊長	中村 義久大尉	
副官	土居 利雄中尉	白川 道見習士官
主計	佐藤 孝少尉	
軍医	宇都宮 章大尉	渡辺 清中尉
	小松 鎮雄少尉	

第9中隊

中隊長	勇野喜正泰中尉	
小隊長	田中 道雄少尉	田辺 正美少尉
	井上 清准尉	

第10中隊

中隊長	鈴木 義基中尉
小隊長	田中 少尉
	請川 利続准尉

第11中隊

中隊長	宮本 実中尉	
小隊長	尾崎 信夫少尉	壺内 光春少尉
	合田 一実少尉	

第12中隊

中隊長	森 英昭中尉
-----	--------

小隊長	森岡 秀俊少尉	堀本 照夫少尉
	守屋 少尉	

機関銃中隊

中隊長	西山 義男中尉	
小隊長	内田 英雄少尉	平尾昌明少尉
迫撃砲隊長	奥田 富虎少尉	
速射砲隊長	久保 学准尉	

- (3) 26日朝出陣式を行い、6時45分宝宝営門を出発。
約2軒行軍の後、宝宝訳にて待機していた貨車に乗車した。
師団長鷹森中将以下幕僚の見送りを受けて宝宝を出発した。
- (4) 3月1日夕釜山曾、ここで防寒服と防暑服とを交換した。
3月12日夜他の輸送船と船団を組み横浜沖を出航した。
3月13日夜半、米潜水艦の魚雷攻撃を受け護衛艦竜田は轟沈し、輸送船中にも炎上するのが見られた。このため船団は一たん東京湾付近に退避して再出航したのであるが 出陣早々戦雲ただならぬものがあった。
- (5) 玉銚丸の乗船部隊は第6派遣隊となり、グアム島の守備に任ずる旨示達された。
輸送指揮官 重松 潔少将
副 官 福島 正次少佐 宮西竹一大尉 総員 5,100名
- (6) 日本軍基地航空の潰滅とマリアナ沖海戦
昭和19年6月11・12日、グアム・サイパンの日本軍基地航空部隊は、敵機動部隊の攻撃を受けて殆んど地上で潰滅した。また、6月19・20日、わが機動艦隊がマリアナ西方海上に米機動部隊を攻撃した所謂マリアナ沖海戦の結果、制空・制海権は完全に米軍の手に落ちた。
- (7) グアム島の孤立
7月7日|サイパン島が早期に失陥したため、太平洋の防波堤による絶対国防圏設定の夢は空しく潰え去り、グアム島は孤立無援の状態となり、マリアナを基地とするB-29の日本本土爆撃をも可能にした。
(注) このような苦しい状況においてグアム島の戦闘は開始された。
- (8) 米軍上陸前の中付・宮西亮大隊の配備(要図参照)
米軍上陸時の両大隊の配備は次のとおりであった。

a 中村大隊

本 部	肥後岬南方高地
卵9中隊(勇野喜中尉)	浅間岬地区
第10中隊(鈴木中尉)	見時岬肥後岬間
第11中隊(尾崎中尉)	明石海軍工廠から基地まで
速射砲	見晴岬(1)浅間岬(2)
大隊砲	見晴岬後方凹地から大隊本部高地へ移動

b 宮西大隊

折田付近に旅団子偏として控置され、肥後台上の陣地構築を行っていた。

大隊本部 折田付近

森中隊 第3飛行場（平塚）の設定作業に従事していたが、敵の上陸直前に品川へ集結した。

八木中隊、MG中隊 折田

橋本中隊 肥後台西端付近の陣地守備。

別図 中村大隊（第1大隊）・宮西大隊（第4大隊）配備図（19.7. 20）

3. 作戦準備 中村大隊の到着から米軍の上陸までの概況

a 中村大隊上陸時の一般状況

冷 蔵庫、自家用車等を持ち、風光明媚、然も南方特有のデング熱もなく、毒ヘビ
もい ないので 南洋の竜宮島ともいべきものであった。

行 われるやもわからない状況であったため、防禦準備、就中陣地術築は急を要した。

(3) 特に選ばれてグアム島の守備にあたった日本軍部隊は、南海支隊がラバウルへ転進して以来、同島を守備していた海軍部隊と、3月上旬満洲遼陽から進駐した第29師団主力と、3月下旬新に到着した中村大隊を台む第6派遣隊とで総計約21,000名でありいずれも当時精鋭を誇った現役部隊であった。

b 作戦準備の進捗と米軍の砲爆撃開始（付図参照）

を 交代し付近の民家等を利用して宿泊して陣地構築に着手した。

(2) 陣地構築

に 空認の被害防止のため、弾薬・糧秣を収納するための洞窟式貯蔵所の構築から着手し逐次コンクリートによるベトン陣地の構築に拡充した。これらの工事は順調に進捗したのであるが、それは大隊副官白川見習士官（徳島工専土木科卒）の熱心な技術指導に負う所が大であった。

大隊長以下全員昼夜兼行で作業に従事し、大隊の陣地構築作業は日とともに能率をあげた。この間、軍紀は極めて厳正で士気亦極めて旺盛であった。消灯前の勅諭奉読も宝東時代と何ら変るところなく、最後に唱える「我身をもって太平洋の防波堤たらん」（註 これは軍司令官小畑中将の統率方針であった）の声は、椰子林の海岸を通して南十字星の光を反射する青い海の彼方へこだましていた。

(3) 第6派遣隊の改編

第6派遣隊は現地において独立混成第48旅団(5月22日編成完結)と独立混成第10連隊とに改編された。

この時、第12中隊が宮西大尉を長とする第319大隊に編入され、中村大尉を長とする第320大隊は総員約500名となった。

4 作戦実施—米軍の上陸と両大隊の健斗

a 作戦の序幕

7月13日、洋上の敵艦隊は空母12を含み274隻を数え、正午頃の米軍在空機は約1,200機に達した。

米軍の準備砲爆撃は爆撃15日間、約7,000t、砲撃13日間、約7,200tで、第2次大戦における最大の砲爆撃であった。

日本軍の戦死者は僅か90名であったが、精神的影響は大きく、野戦陣地は50%、半永久陣地は10%の損害を受けた。

b 米軍の上陸と日本軍の防御戦闘開始

7月21日は早朝から快晴で、グアム島沖には300隻の敵の船団が見え、熾烈な艦砲射撃に支慥されて、グアム島南部の北・西両海岸から0830その第1波は上陸した。この日の上陸直接支援砲爆撃は、

航空機攻撃により 124t

艦砲射撃により 1,652tに上り

準備砲爆撃と当日の上陸直接支援砲爆撃とで、海岸陣地が受けた弾量は

総計 約14000t

米船上陸海岸1Km2当たり 約500t

に達した。

わが守備部隊は善戦敢闘したが衆寡敵せず、同日夕刻までに米軍第1線部隊は海作台端付近に海岸ほ設定するに至った。

c 両大隊の健斗

(1) 7月21日

a 7月21日は早朝から天気晴朗であった。

0600頃から昭和湾及び見晴岬の両方面に同時に艦砲射撃が開始され、1,000機以上の飛行機が対地攻撃を行い、両方面の海上には各々100隻以上の軍艦と200隻以上の輸送船が見られ、0700頃、上陸用舟艇がへん水されるのが望見された。飛行機の対地攻撃は、海岸から漸次後方地帯へ移って行った。

0740上陸用舟艇の第1波が発進し、砲爆撃は益々激化して、晴天は忽ち啼黒化した。

0830頃敵は熾烈な砲爆撃の掩護下に主力をもって浅間岬—肥後岬の間に上陸を開始した。

b 第1波舟艇群に吋して中村大隊は、見晴岬及び浅間岬に配置した速射砲、MG、山砲をもって射撃し、舟艇10数隻を航行不能に陥らしめ、また、水陸両用戦車 数台を破壊したほか、見晴岬こ近く上陸した戦車が水際に敷設した機雷によって 3台が炎上した。

このようにして敵は上陸を強行しつつ、艦砲射撃によってわが重火器及び砲兵の撲滅を図ったので、じ後水際に指向すべきわが火力の大部が破壊されるに至った。

- c 中村大隊の戦闘を支援した砲兵は、独立混成第 48 旅団砲兵大隊(第 2 中隊欠)・独立混成第 10 連隊砲兵大隊の 5 コ中隊であった。
- d 宮西大隊は旅団予備として明石南側に位置していたが、敵の上陸開始とともに見晴岬東方に増援する如く命令され肥後台に増援したが、同日夕 肥後台西端備の橋本中隊は見晴岬に上陸した米軍の側面をを攻撃し、激戦の後殆んど全員壮烈な戦死を遂げた。
- e 配属の三宅工兵中隊は、見晴岬上陸した戦車に対し、中隊長以下全員戦車攻撃隊となって突入し、中隊長は自ら 8 キロの爆薬に点火し、これを抱いて戦車にびつき壮烈な戦死を遂げ、部下またこれに倣って大部が壮烈な戦死を遂げた。
- f 水際陣地を突破した米軍は逐次その数を増し、自動小銃を発射しつつ、大隊本部付近へ迫ったが、白兵を交えるに至らず、そのまま夕闇につつまれ、米軍は岸ほの設定と人員・兵器・糧秣等の揚陸に専念していた。
- g 中村大隊長は、22 日夜、米軍の海岸ほ設定を妨害するため、予備隊たる尾崎中隊をして見晴岬後方の小丘に陣地を占めた米軍に対して夜襲を決行せしめた。白だすきに身を固めた尾崎中隊は、22 日払暁米軍陣地へ突入したが、熾烈な敵火を浴び、全員壮烈な戦死を遂げた。

(2) 7月22日

7月22日午後、米海兵隊は戦車を先頭に背後から中村大隊の本部を急襲した。大隊長以下手榴弾をもって肉薄攻撃を実施したが、米軍戦車は網を張って車体を被覆しているため奏功せず、却って戦車砲の猛烈な直撃弾のため死傷続出した。一方、通信手段が完全に遮断されたため、全般の戦況は全く不明で、ただ、四方に起る砲声や絶えず近くを飛び交う銃弾によって各所に戦闘が継続されているのを知るのみであった。

(3) 7月23日

7月23日は中村大隊の糧秣倉庫であった洞窟に生存者を集結した。この日は轟音をたてて迫りくる米軍戦車に対し、万策を尽して肉薄攻撃を実施した。この間、宮西大隊は朝井村平地に展開した米軍の砲兵陣地を攻撃したが、猛射に会い殆んど全員壮烈な戦死を遂げた。

(4) 7月24日

この日、中村大隊生存者の洞窟は米軍に包囲されるに至った。即ち偽装した洞窟の人入り口からのそいて見ると、約 30 米離れた道路を米軍の戦車と海兵隊員が 続々と通過し、夕方には司令部らしきものを開没し始め、鉄条網に近接予防用の 缶を取付けるのも見えた。

(5) 7月25日

この日もわが洞窟は米軍の包囲の中にあった。夕刻における大隊の生存者は大隊長以下負傷者を含めて約 50 名となり、対戦車用の機関砲を前日の戦闘で破壊されたため、小銃、手榴弾、軽機 1 を残すのみとなった。

中村大隊長は同夜最後の総攻撃を敢行するに決し、その旨を全員に伝えた。当時洞窟内は猛暑の中すでに2昼夜を経過したため一滴の飲料水もなくなっていた。

25日24時(26日零時)中村大隊長は、これ迄の将兵の敢闘に対する感謝と訣別の辞を述べ、一升瓶の底に残っていた一滴の酒で最後の盃を交し終ると、自ら頭に立って洞窟外へ出で、全員洞窟外に次の通り隊形を整えた。

当初、米軍に発見されることなく前進したが、電波探知器のため発見され、四周から集中集中射撃を受けて死傷者続出し、「天皇陛下万才」「お母さん……」と叫ぶ声は深夜の闇を貫いた。

中村大隊長は、決然立って突撃に移り、全員これに続き、一挙に鉄条網を手榴弾で破壊して敵陣地に突入し、勇戦敢闘の後、相前後して殆んど全員壮烈な戦死を遂げた。

少数の生存者は相励まし、春田へ移動して師団主力に合して戦闘を続けた。

d 中村大隊各中隊の戦闘概要

(1) (勇野喜中隊)

7月21日、敵は主力をもって中隊の右第一線小隊正面に上陸し、該小隊は水際陣地において敵上陸部隊及び舟艇に対し攻撃を敢行したが、上陸直前の敵艦砲射撃により過半の戦死傷者を出したため、予期の戦果をあげ得なかったが、よく勇敢奮戦し、上陸歩兵に対し多大の損害を与えた。

夕刻までに大部が玉砕した。中隊長は浅間岬拠点に位置し戦闘を指揮し、該岬配備のMG、TAをもって上陸した敵の右側面に夜襲し、又22、23日は昼夜連続該岬拠点において熾烈な艦砲射撃、空爆を受けつつも、なお部下を激励してMGをもって敵を射撃し、孤軍奮闘よく戦闘を持続した。

24日払暁前、更に生存少数兵をもって反撃を実施し、激烈な白兵戦を敢行したが、逐次銃声喊声共に跡を断った。勇野喜中尉は、米軍上陸後4日間孤軍奮闘よく陣地を死守して任務を完うしたのである。

(2) 第10中隊(鈴木中隊)

敵は肥後岬陣地に対し艦砲射撃を実施してこれを制圧しつつ、肥後岬西側海岸に上陸を敢行した。この敵に対しては見晴岬より側射したが、遂に撲滅せらるるや米軍は一挙に海岸に達着し、肥後河底より逐次高地に向けて前進した。

肥後岬守備小隊(請川准尉)はMGを洞窟砲座より道路上に移動してこれを射撃し多大の損害を与えたが、遂に白兵戦となり激戦の後、全員玉砕した。

見晴岬守備小隊は、敵上陸時の艦砲射撃とこれに続く白兵戦によりほとんど全員壮烈な戦死を遂げた。

鈴木中隊は、上陸後東へ向かう米軍攻撃の矢表に立ち、壮烈な肉弾戦により任務を完遂したのである。

(3) 第11中隊(尾崎中隊)

7月21日、中隊の守備正面には敵は上陸しなかったため、見晴岬より明石西郊墓地方向に向う敵の前進に備えた。

敵は 21 日夕刻までに見晴～肥後岬間に水陸両用戦車約 20 両を上陸し、見晴岬後方の小丘に陣地を占めた。中隊は大隊命令により 22 日払暁これを攻撃した。中隊長は自ら中隊の先頭に立ち、肉攻班を指揮して敵戦車群に突入して損害を与えたが、熾烈な射撃を受け、中隊長以下全員壮烈な戦死を遂げた、尾崎中隊は米軍上陸直後、これを撃滅するため勇敢なる反撃戦闘によりその任務を完遂したのである。

(注) 尾崎中尉は宮本中尉に代わって中隊長となった。

5. 本戦の特色と成果の概要

中村・宮西両大隊は文字どおり絶対被制空、制海権下において 4 Km 以上の広い正面を担当し、爆撃 15 日間、艦砲 13 日間の史上例を見ない大規模かつ長期間こわたる砲爆撃の後、米第 3 海兵師団約 2 万名の攻撃を受けつつ、大隊長以下よく団結を保ち、最後の 1 名となる迄、戦友の遺骨を抱き、カバネを越えて勇戦敢闘し、米軍の上陸後 5 日間、海岸地帯において組織的抵抗により敵の海岸堡の完成を阻止した。

この成果は、更に友軍部隊に引き継がれて、米軍海兵旅団が海岸堡を完成したのは上陸後 8 日目のことであつた。

このように長期間、敵の海岸堡の完成を阻止したその成果は、まさに世界の戦史に冠たるものであつた。

6 慰 霊 の 辞

以上の戦いの跡を回想し、今なお椰子の木蔭にねむる幾多の英霊に謹みて慰霊の辞を捧げたい。

顧りみますれば、米甲の反攻が激化するに伴い、皆様方が特に選ばれて太平洋戦争の天王山の決戦場たるこの方面の防備に就かれましたのは昭和 19 年の春尚浅い頃でありました。じ来身をもって太平洋の防波堤となるべく、鋭意作戦準備に邁進せられ、7 月初旬サイパン島守備部隊の玉砕により、グアム島守備部隊は孤立無援の状態となりましたが、皆様の士気は愈々軒昂たるものがあつたと承っております。やがて言語に絶する大規模な砲爆撃の後、7 月 21 日米軍の上陸を迎えられましたが、じ来絶対被制空、制海権下圧倒的な鉄量にも断乎として屈することなく勇戦敢闘せられ、進攻米車の海岸堡の成立を長時日にわたり阻止されましたことは第 2 次大戦において太平洋戦場は勿論、西欧戦場においてもその例を見ないところであり、まことに日本軍の精華を遺憾なく發揮されたものと敬服措く能わざるところであります。

皆様方が祖国の為にご尽力下さいました赤誠と御遺勲とに対し、私共同胞こぞって篤い感謝と深い哀悼の誠を捧げますとともに、皆様の善戦敢闘の偉業を後世にまで伝えるべく念願して已まない次第であります。

今や阻国の山川風物は、戦前の平和な姿にかえり、全同胞は新日本建設のため日夜勉勵しております。皆様方が貴い血をもって残された珠玉の教訓を必ず今後の日本防衛に役立たすべくお誓い申し上げます。